あさ

6

2011

新宿マルイ屋上庭園

恩田秋夫の一茶俳句切手

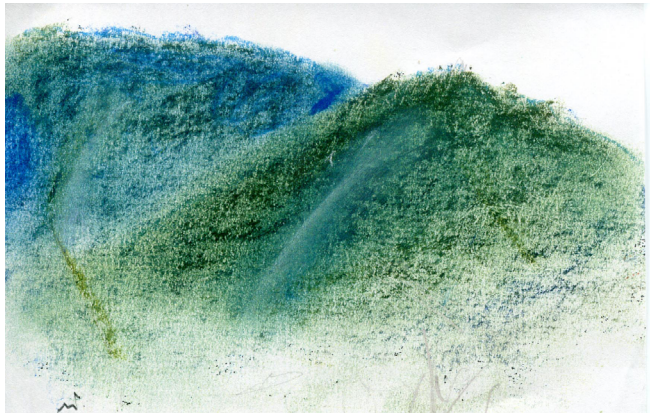
山里は馬の浴るも清水哉
母馬が番して呑す清水哉
夕陰や清水を馬に投つける
人立を馬のまつてる清水哉
なでしこの折ふせらるゝ清水哉
我宿はしなのゝ月と清水哉
挑灯を木につゝかけて清水哉
人の世の銭にされけり苔清水
観音の足の下より清水哉
人里へ出れば清水でなかりけり
戸隠の家根から落る清水哉
姫ゆりの心ありげの清水哉

一茶

恩田邸は夏はまことに過しやすいたたずまゐである。天井は高く、廊下が広く南向きのお部屋でも日差しは部屋に届かない。先生は東京生れで東京で育つたが本籍地は長野県長野市松代町と略歴にある。きつと馬も親しい生き物であつたのであらう。

あと

六月



亀鳴く

芹摘に町騒もどる立上がり
落花あり五重塔の影よぎり
原發が鬼の口開け貝櫓
亀鳴けりストロンチュウム降りやまず
いつよりの俳人ぎらひ藥降る

本町三　佐藤喜孝

⊕

風船が象にかはりしややの宙
かげろひし木々の透き間にはいりこむ
おばしまに凭たるる肩の糸桜
かひなきず弥勒菩薩に花のはな
春昼や盗み竹にはしづごころ

鍋屋横丁　吉弘恭子

奄美大島

太平洋東シナ海暮春かな
海沿ひにびっしりと咲く車輪梅
分合へる刺身は旬の夜光貝
音も無く椎の花降る森巡る
雨多き島万緑の中に在り

清瀬　赤座典子

⊕

海底を浮かれだしたか春の地震
停電の夜空輝く春の星
コーラスの春の練習千の風
きくらげと根菜ばかり春料理
子の無くて空家となりし白木蓮

聖蹟桜ケ丘　安部里子

震災

春なのに地球は軋み又きしむ
原子炉や田螺はここに住むと云ひ
殊更に菠薐草は世に知られ
曝されし東北の地に鳥交る
人知れず墓守りたる花薊

曳舟　遠藤実

⊕

三合の米研ぐ日々や穀雨かな
地震来ぬかと身構へて日々米をとぐ
音もなく海ふくれ来る春北風
東京タワー少しかしいで春の地震
富士いつか怒る日ありや花白茅

逗子　鎌倉喜久恵

⊕

三・一一名残の孤松浜に有り

帆立貝唇汚し喰ひし日も

気病して今年の花にあひそびれ

キウリもみあはす三陸若布なく

鯉のぼりほど佳き風のあればこそ

川崎・小田栄　木村茂登子

⊕

走り根を浮き立たせをり花の屑

余花の情読経の声のそろひをり

まばたきす春のうれひの盲導犬

めまとひや緊急地震速報音

亜米利加のともだち作戦春の風

京橋　篠田純子

⊕

杖が知りはじめたものに花疲れ

目礼の距離にのどかさありにけり

春の猫ひねもす寝たり寝たりかな

至る所に青山は無し残る鴨

花吹雪風のねじれに添ひにけり

千駄木　芝　尚子

⊕

輪になって家族の絆余寒かな

西空に眞赤な火の玉遅日かな

タンポポが只一株で歩道わき

つとに目にまっ黄黄の八重山吹

久に来し学舎の庭の花万朶

宝泉寺前　芝宮須磨子

麦　雨

とんかちで羽目打つ妻よ花ぐもり
終バスか春月ついてゆきにけり
一艘の過ぎてし卯波また卯波
戸袋へ戸を繰り入るる初蚊出づ
麦雨にも音が正直トタンかな

剱地東出（つるぎちひだしで）　定梶じよう

㊥

徒ならぬ日の重なりて桜咲く
牛産まる春の朝日のかがやけり
葉桜や子育地蔵上（かみ）の坂
坂のぼり著莪咲く庭に藤穂さん
山吹や句会ほこほこ横坐り

所沢　須賀敏子

国鉄と言はなくなりし柿若葉
水すまし脚のぶつかり合ふ音す
葉桜や鉄剤をのむ水の味
蛍くさいてのひら嗅いで別れけり
久慈川の鮎のうはさも梅雨のころ

浦和　竹内弘子

黄　蝶

人集ひ古家艶めく花の昼
ゆらゆらと黄蝶高みに余震かな
江戸前の烏賊糸づくり春夕べ
荷風の忌見下ろしてゐる屋形船
線で消す電話番号鳥雲に

田端　田中藤穂

⊕

春の空へうたん池に細波す
鬱蒼の透き間よりくる若葉風
囀と子らの喚声自然園
植樹して四十年の櫻かな
ふるさとの山中櫻はまだ莟

三光坂　東亜未

春愁

春愁や日日自粛祈るのみ
春愁地震速報息詰まる
春愁河口静まり氣味わるき
球を打つ雀隠れに足伸ばす
独り居の集ひて笑顔木の芽和

富田　長崎桂子

⊕

うぐひすの突如の美声地震もなし
何となく落ち着かぬ日々春惜しむ
菜花畑乱舞のごとくもんしろ蝶
変りなく海のしづかな鳥羽の春
春耕の人影遠くなりゆきぬ

大宮　早崎泰江

⊕

バラの花束数多の棘を知りつくし
冷しさうめん啜る十年の長さかな
少年に四谷怪談白き夏
やりたいことをして目に涙五月盡
台風一過呑み友だちを失へり

河田町　堀内一郎

落合　森　理和

三月十一日東日本大震災

いろといふいろすべてもちさり春の海

めまとひのロンドロンドに身を反す

たんぽぽに声掛けらるる投票所

葉ざくらやぽつりとありし朝礼台

区議選に死票とならず立浪草

五月作品より

定梶じよう

洋髪の寫眞の母の隣かな

佐藤喜孝

「洋髪の寫眞の母」まで把握したら、従来の作りようなら、季のことばを探してきて、

寫眞の母が暖かし　なぞとくっつけて、一句なれりとしたことでしょう。でも、この作者は違った。何の説明もなく突然、幼少の作者（多分）をその隣りに登場させたのです。セピア色を想見する「洋髪」の語と「寫眞」の旧字。母の隣に誰が居るかの省略、それがどうしたかの説明がないこと、等々。句作りの要諦が詰っている一句なのです。

花ひらくやうに言葉をふやすやや

佐藤喜孝

「やや」はみどり児。言葉の修飾（文飾の意ではありません）で成っている一句。これもまた句作りの要諦の一面なのです。

みどり児が言葉を身につけてゆく過程は尋常なことではないそうですが、よそ目には誰でもそれを経て大人になってゆく。それを「花ひらくやうに」と形容した。言葉を憶え、ふやしてゆく過程を詩のことばに置き換えたのです。

「花ひらく」の花を、俳句上の約束である「桜花」ととるか、チューリップのような一茎一花のものと解釈するか。約束通り「さくら」ととるのが作者の意図なのかもしれませんが、チューリップのような大きな花びらがひらいていくようにことば数をふやしてゆく、として鑑賞するのも悪くない。であれば無季の句になりますが。

三月のじりじりと過ぐ無力なり

赤座典子

今度の震災を詠んでいるのでしょう。直接的な言葉を遣ってない分、いたいたしさが身に沁みます。あるいは作者には、誰に対してとも、何に対してともいえぬ怒りがあるのかもしれません。そして結句

洋髪の冩眞の母の隣かな　佐藤喜孝

「洋髪の冩眞の母」まで把握したら、従来の作りようなら、季のことばを探してきて、

冩眞の母が暖かし　なぞとくっつけて、一句なれりとしたことでしょう。でも、この作者は違った。何の説明もなく突然、幼少の作者（多分）をその隣りに登場させたのです。セピア色を想見する「洋髪」の語と「冩眞」の旧字。母の隣に誰が居るかの省略、それがどうしたかの説明がないこと、等々。句作りの要諦が詰っている一句なのです。

花ひらくやうに言葉をふやすやや　佐藤喜孝

「やや」はみどり児。言葉の修飾（文飾の意ではありません）で成っている一句。これもまた句作りの要諦の一面なのです。

みどり児が言葉を身につけてゆく過程は尋常なことではないそうですが、よそ目には誰でもそれを経て大人になってゆく。それを「花ひらくやうに」と形容した。言葉を憶え、ふやしてゆく過程を詩のことばに置き換えたのです。

「花ひらく」の花を、俳句上の約束である「桜花」ととるか、チューリップのような一茎一花のものと解釈するか。約束通り「さくら」ととるのが作者の意図なのかもしれませんが、チューリップのような大きな花びらがひらいていくようにことば数をふやしてゆく、として鑑賞するのも悪くない。であれば無季の句になりますが。

三月のじりじりと過ぐ無力なり　赤座典子

今度の震災を詠んでいるのでしょう。直接的な言葉を遣ってない分、いたいたしさが身に沁みます。あるいは作者には、誰に対してとも、何に対してともいえぬ怒りがあるのかもしれません。そして結句の「無力なり」に集束していく。

中七の焦燥感と「無力なり」の諦感。

剪定ののちの小鳥の落ちつかぬ　安部里子

枝葉を刈込んだあと、平常どおり上下左右を見まわしている小鳥の動作が、くわしく見えるようになった分、いかにも落ちつかなげに見える、ということでしょうか。

「落ちつかぬ」は単なる擬人化ではない。「ように見える」という曖昧さを、「落ちつかないことであるよ」と、詠嘆に転化した。連体止めの効果。

のどけしや昼寝に地球の廻る音　遠藤実

騒然とした世の中、のどかな昼寝だからこそ地球の回転する音が聞えた。どんな音なんでしょう。でも、その音は誰にも言えますまい。

誰にも言えないことですが、しかし確かに音はしているのです。こんな大きな球が回転していて無音である筈がないではありませんか。そしてあるいは、その軋みが震災に繋ったのかも。

白木蓮美しすぎる今年かな　木村茂登子

掲句も震災にかかわる一句でしょうか。典子さんの句と同様、地震や津波などのことばは遣っていないのが一層かなしい。震災の悲痛を思えば、大がちな花の白さが心にしみて、むしろ秀美に過ぎる、と茂登子さんは考えたのです。そして時よ疾く進め、の思いが「今年かな」の措辞になったのです。

春の蚊が余震の中を飛んでゐる　篠田純子

余震も本震も、蚊にとっては区別する必要はありますまい。ともかく揺れたら飛翔するしかない。あるいは人にとっても、揺れている時に、飛んでいるわい、とは把握しても、蚊に対して余震本震の別は意味をもたない。でも、作者は考えた。余震でなければならぬ。主震は、一回きりとはいえない迄もまあそう言っていい。だが、それに匹敵する余震は延々とつづくわけです。だからこそ余震の中を飛ぶ弱々しい蚊に真実味があるのです。

春が夏に、やがて残る蚊になるその頃、この災害は？

の「無力なり」に集束していく。

中七の焦燥感と「無力なり」の諦感。

剪定ののちの小鳥の落ちつかぬ　安部里子

枝葉を刈込んだあと、平常どおり上下左右を見まわしている小鳥の動作が、くわしく見えるようになった分、いかにも落ちつかなげに見える、ということでしょうか。

「落ちつかぬ」は単なる擬人化ではない。「ように見える」という曖昧さを、「落ちつかないことであるよ」と、詠嘆に転化した。連体止めの効果。

のどけしや昼寝に地球の廻る音　遠藤　実

騒然とした世の中、のどかな昼寝だからこそ地球の回転する音が聞えた。どんな音なんでしょう。でも、その音は誰にも言えますまい。

誰にも言えないことですが、しかし確かに音はしているのです。こんな大きな球が回転していて無音である筈がないではありませんか。そしてあるいは、その軋みが震災に繋ったのかも。

白木蓮美しすぎる今年かな　木村茂登子

掲句も震災にかかわる一句でしょうか。典子さんの句と同様、地震や津波などのことばは違っていないのが一層かなしい。震災の悲痛を思えば、大がちな花の白さが心にしみて、むしろ秀美に過ぎる、と茂登子さんは考えたのです。そして時よ疾く進め、の思いが「今年かな」の措辞になったのです。

春の蚊が余震の中を飛んでゐる　篠田　純子

余震も本震も、蚊にとっては区別する必要はありますまい。ともかく揺れたら飛翔するしかない。あるいは人にとっても、揺れている時に、飛んでいるわい、とは把握しても、蚊に対して余震本震の別は意味をもたない。でも、作者は考えた。余震でなければならぬ。主震は、一回きりとはいえない迄もまあそう言っていい。だが、それに匹敵する余震は延々とつづくわけです。だからこそ余震の中を飛ぶ弱々しい蚊に真実味があるのです。

春が夏に、やがて残る蚊になるその頃、この災害は？

校庭の低い鉄棒走り梅雨　竹内　弘子

小学校の運動場。大概その隅っこ辺に立つ。低学年と高学年用に、二段ないし三段に別れていて、帰省子なんぞが散策の途次手をかけたりするけれど、高学年用でも低すぎる。今は雨中。誰もいない。だからその高低がよけいに懐かしい。

こんなふうにイメージをふくらませることができるのも、説明をしていないから。分っているのに説明のことばをつい使ってしまうのも、また俳句なのです。

吟行案内

矢切の渡し

日時　七月三十日（土）十一時

集合場所　北総電鉄「矢切」駅

予定コース　矢切駅→野菊の墓文学碑→矢切の渡→柴又帝釈天→京成「柴又」駅

参加希望者は七月十五日までご連絡ください。

090-9828-4244　佐藤喜孝

近世俳諧と漢詩文　四三

王　岩

留與他人楽少年といふ詩の心ばえも、身につみておもひしらるゝ事あれば

糸きれて誰か結ばん紙鳶　　正秀

正秀、明暦三年（一六五七）～享保八年（一七二三）八月三日。水田氏（一説、永田氏）。名は正秀。通称は孫右衛門（利右衛門とも）別号に竹青堂・節青堂・竹節堂・散正士・清庵などがある。近江膳所の人。和歌を竹内惟庸に学び、俳諧は初め尚白門、のち芭蕉に師事。湖南蕉門の一員として活躍し、義仲寺に無名庵を建てるなど師によく尽くした。編著に『白馬』（元禄十五年）、『百雀』（宝永四年）などがある。問題の句は『芭蕉盥』（朱拙・有隣編　享保八年）に見える。

前書きの「留与他人楽少年」は唐詩人の司空曙の七言絶句「病中遣妓」の結句である。

万事傷心在目前、　　万事　心を傷ましむること　目前に在り
一身憔悴対花眠。　　一身　憔悴し　花に対して眠る
黄金散尽教歌舞、　　黄金　散尽して　歌舞を教え
留與他人楽少年。　　他人に留與して　少年を楽しましむ

詩題の「病中に妓を遣る」は、病気療養中に、妓女に暇をやるとの意味である。唐代には自家に妓女を養う風潮があり、家妓と称した。司空曙の詠んだ妓も家妓であろう。

病気にやつれ衰えた老身に差し迫った傷心事、花のように美しい家妓を前にしても、現今、とろとろ眠るしかない。自分が大金を使い果たして歌舞を教え込んだこの家妓だが、結局、他人に残してやって、その青春を楽しませる始末になった。

「留與他人楽少年といふ詩の心ばえも、身につみておもひしらるゝ事あれば」と前書きして正秀が詠んだ句も、病中にやむを得ず家妓を帰した唐詩人の司空曙と同じ心情を詠んだ。

空高く挙げられた凧は強風に煽られたせいか、その糸が切れ何処かへ飛んで行った。折角、丹精を凝らして作り上げた凧は誰かの手に落ち、また糸を結わえて再び空高く挙げられるであろう。こっちの凧は結局他人の楽しめる物となり、遣りきれない気持ちで一杯である。

水田正秀発句抄

畦道や苗代時の角大師
猪に吹かへさるゝともしかな
しがらきや茶山しに行夫婦づれ
打こぼす小豆も市の師走哉
菱枯て蛙しづめり池の秋
塩かりて来る隣有けしの花
蛍見や田楽さめぬ七つ鉢
なげいれて昼寐忘るゝ桜哉
唐網に袖濡れて聞鶉哉
花咲や皆丸腰の供つれて
涼しさや駕籠に隙やる茶屋の店
薪ともならでくちぬるかゞしかな
あんどんをけしてひつ込よ寒哉
ちかづきになりてくつろぐ花み哉
月代にゆめ見て飛か蝉の声
茶ぼこりの手をあらはばや真桑瓜
夜あらしや鴨の腹する長等越
ゆかしさをともにうなづく柳かな
さわがしくならぬとり得や古紙子
雉子鳴くや倶利伽羅峠まだ五丁
小あらしや花の波のるかよひ舟
雫垂る仏の頬や夏木立
まだしらぬ人もありつる西瓜かな
水鳥の大崩れするあられかな
鳩吹のかくれ比也そばの華
挑灯の消て貴きほたる哉
いなづまにおそはれて飛烏かな
秋風や猿も梢の小いさかひ
鶯と勢くらべかや木樵哥

しげ女（正秀妻）二句

釣鐘をおづおづのぞく花見哉
としのくれもらうた羽が我が宝

あをかき集

田中藤穂選

ふらここに腰かけて待つ投票所　赤座　典子
店番の分厚き漫画雀の子
歯応へに島旅偲ぶ水雲かな
切抜きの記事数多なり啄木忌
小さき葉二年（ふたとせ）を経てシクラメン
昭和の歌一日流る昭和の日

麦秋の畑舞台に鎌を研ぐ　遠藤　実
富士山の水の育てし新茶かな
麦秋や暮色の大地に祈る人
春の月どこまで行くか訊かれけり
江戸切子夫婦に揃へ夏に入る
汐入池萍下を鱣ひらり　篠田　純子
春の昼ミルクの水を買ひに出る
水上バス桜の下で拍手湧く
平成の燈下管制春寒し
憎ませて愛しつづける青葉梟
ちゅうりっぷ襁褓とれずに登園す
津波禍に住居地一変春遅し　長崎　桂子
残る柚子浮かべ今夜の安定剤
にこにこと話しかける児春の風
野遊びの古き筵や握飯

春風や同年と語りなつかしむ　手のひらにのせて全き月日貝
外回り直す踏台四月尽　目鼻だち母に似ぬとて葱の花
猩猩袴ぽきり攫ふは何処の誰　森　理和　川筋の柳のめぐみ雨匂ふ
蕗味噌やお米研ぐ手のわくわくと　花の雲大風止まぬ日なりけり
春の鬱湯飲み茶わんの重き事　万歩計葉ざくらのみち通夜の道　佐藤　喜孝
樟若葉清められをる外廊下　春愁のひっくり返す砂時計
目鼻咽海馬朦朧春花粉　鉄蓋のまはりを囲む犬ふぐり
雪嶺のはっきり見えて花日和　須賀　敏子　糸桜指を絡めてみたくなり
高遠の由緒正しき桜かな　陽炎や捨て井戸に乗す石ひとつ
遠出して万朶の桜と巡り会ふ　分身となりてきし杖花のもと　芝　尚子
大地震の地にも変はらぬ桜咲く　桜餅母の遺影のほころべり
余震なほ続いてゐたり四月冷ゆ　アネモネや寝足りし朝のまた睡く
何色と言ひあらはせぬ若葉山　春深し雨のしずくの音すなり
いつの間にか日陰を好む季節(とき)となる　老いどちの何をよろこぶ花の下
露地奥に細く耀く春の海　鎌倉喜久恵　夕焼がチラと病窓春いまだ　吉弘　恭子

春昼や見え隠れする蜘蛛の網
濃きうすき若葉のなかの乳母車
初燕街道沿ひを目で追へり
ゴールデンウィーク楽しむやうに燕くる

佳句後言

店番の分厚き漫画雀の子　典　子

何だか救われるように楽しいのんびりした句です。雀の子がぴったり合っていて、一枚の絵が画けそうです。

昭和の唄一日流る昭和の日　〃

昭和の初めに生まれた私にとっては、昭和の唄はどれも懐かしく聴いたが、この頃、昭和はよかった、みたいな風潮が出ているのは、考えさせられる。

若者たちが兵隊にいったり、特高がいたり、家の中の煖房は、火鉢・炬燵くらいで、霜焼けが出来たり……。

春の月どこまで行くか訊かれけり　実

何だかとらえどころのないような句だけれど、いろいろな場面を想像してしまう。その曖昧さが、春の月と作用しあって不思議な雰囲気がかもされる。

そういうのを俳味というのでしょうか。捨てがたい句です。

江戸切子夫婦に揃へ夏に入る　〃

仲の好い楽しいご夫婦。江戸切子が粋である。切子ガラスも夏の季語だけれどこの句の場合、あまり気にならなかった。

爽やかな好感の持てる一句でした。

春の昼ミルクの水を買ひに出る　純子

三月十一日の大地震、大津波によって、福島第一原発に被害が及び、一番恐れていた放射性物質が空気中や海へ流れ出た。そして一時、それが水道水にまでまじって、放射線の価が高くなり、乳幼児は水道水を飲まないようにと、汚染されてない水が配られたりした。この句も、その折の句と思う。水道水は間もなく安全な価に戻ったけれど、この句は、記念すべき恐ろしい一句だ。一刻も早く、福島の原発の破損を修復してもらいたい。全日本人の願いだと思う。

津波禍に住居一変春遅し　桂子

平成二十三年三月十一日の午後、突如襲った大地震大津波は、あっという間に三陸地方の街々を破壊し、関東の北東部にまでその被害が及んだ。テレビがまざまざとその有様を映し出し、直接被害にあわれた方達に、何と言葉をかけたらいいのか、私などまだわからないでいる。この句は、春遅しの中に、作者の深い気持がこめられている。復興にも、人々の心の回復にも、長い時間がかかることと思いますが、敗戦の日本が立直ったように、きっと立派に立直ってくださることを信じ祈ります。津波を被って泥に汚れた庭にも水仙が花開き、生命あるものの素晴しさに感動しました。

蕗味噌やお米研ぐ手のわくわくと　理和

この作者はよっぽど蕗味噌が好物なのでしょう。あったかい白い御飯の上にのせて、早く味わいたい。日常生活の中に、こんなに心を躍らせることがあるのは素晴しい。

蕗味噌も、摘んできた蕗の薹で手作りの物かも知れません。

露地奥に細く耀く春の海　喜久恵

海辺の町でよく出合う光景ですが、細い露地の先に急に耀く海が見えた時の感動は何度味わってもその都度感動します。

分身となりてきし杖花のもと　尚子

もうすっかり使いこなして分身のようになった杖、老年の安らぎと、少し悲哀も感じられる。それを上手に表現している。

六月某日、「都立家政」の辺りを歩いていたら変ったドクダミの花を見ました。これでは十薬と呼べません。私は連れがゐたので真上から撮りましたが、ネットで横からの写真を見ました。なかなかきれいな姿をしてゐます。〝白雪姫〟といふ名で園芸店で売られてゐるさうです。

森山のり子さんのこと

田中藤穂

『暖流』の谷中句会に私が初めて伺った昭和五十四年、のり子さんはもう句会にいらしたのですから、思えばずい分長いお付合いになります。『暖流』主宰の瀧先生が亡くなられ、谷中句会もやがて終りになり、私は『獐』『あを』と暖流つながりで俳句を続けていて、のり子さんも佐藤喜孝代表とも前からご縁もあり「あを」に入会されました。

のり子さんは茶道の先生をしていらして、お子様はなかったが、お稽古のお弟子さん方が出入りして忙しく賑やかなお暮しのようでした。やはり足腰が弱って、「あを」の傳句会には一度いらしたきりでした。お若い頃は御主人のお仕事で海外に暮らされたこともあったようで、のり子さんの句はどこかモダンで若々しかった。のり子さんの生家と私の生家はとても近かったようで、時々お電話で昔のことや町のお店屋さんのことや楽しい長話をしました、

のり子さんが日暮里の有料老人ホームに入られたのは、暖流以来の仲良しの方が先にそこに入られ、伺ってみたらとても明るくてよい感じなので、そしてたまたまその方の隣室が空いたので、今年の三月三日に急遽入室されました。その前に元気な声で、お電話があって、引越し・片付けで大童なので、おちつくまで「あを」への投句を休みたいので、佐藤さんへよろしくお伝え願いたいと、その他いろいろ沢山お喋りをして、落着いたらホームへお訪ねします、などとも約束して電話を切ったのだった。

入室なさって九日目にあの大きな地震が来て、たまたま隣室のお友達と一緒にいたのでよかったとの事でした。でもそのあといろいろなお疲れが出たのでしょう。一週間ほど熱が続き、最後は救急車で東大病院に入り、そのまま亡くなられたのでした。享年八十八才、お伺する約束は果さず仕舞になってしまいましたが、私には、一度だけ傳句会にいらした時の、とても素敵な薄オレンジ色のレインコートの色が、今も目に残っております。

四月号のあをかき集に、のり子さんの五句が載ってをり堀内一郎さんの佳句後言にもとりあげられてをります。

擦れ違ふ乳母車にも冬帽子

幼児に飴玉もらふ梅三分

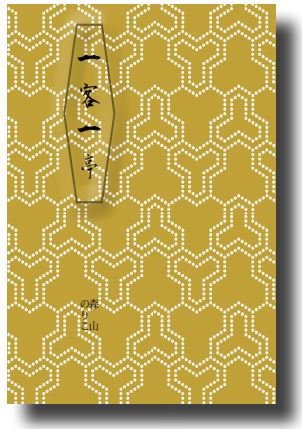
雪原の子馬の眠り涙溜め

買ひ求む魔女人形や春の街

春立つや心洗はれミサの鐘

急逝されたのはとても残念ではございますが、八十八年、見事な一生であったと思います。

今はただ心からご冥福をお祈りしたいと思います。



チューリップ蔭より天使覗みる
料峭や孤独心をもてあます
誰も居ない大観覧車走り梅雨
舟で往く若狭の浜の青田かな
白玉の喉越し楽し峠茶屋
爽やかやパッチワークのやうな牧場
初時雨一客一亭茶飯釜
雪の日の一句を記す箸袋
携帯の使ひ始めは花だより
札所寺牛小屋に吊る唐辛子
夢多き児等の壁画よ秋日和

十六夜の月を間近に観覧車
ほろにがき鬼灯の味父思ふ
瑠璃色の器にもりし桜漬
松虫草硫黄の臭ふ珈排館
尉払ふ鶴の羽ばうき初点前
初釜や障子の内の笑ひ声
あたたかき土こぼしつつ野蒜ぬく
音も無く牡丹崩るる石の階
秋暑し空地に残る水道管
年の瀬や買はず終ひの宝籤
留石の奥へ落葉の彩重ね
初霜を踏みつつ茶花を選ぶ朝
小春日やチェロの調べの手術室
折り畳む杖をバックに桜狩
春浅し馴染みし鈴の紐替へる
寒三日生きる証の雨戸繰る
若葉中巣箱のペンキ新しく
梅雨の窓過ぎる女の人魚めく
秩父路や邯鄲の声逃すまじ

さようなら友七さん

竹内弘子

昭和40年、何度目かの抽選に当って、あこがれの住宅公団、浦和の『田島団地』に入居したのは長女が三歳になったばかりの頃だったと思います。土が疎らに見えかくれする芝生を走り廻って転び、いつも膝小僧をマーキュロで赤くして急に子供らしくなりました。

田島ヶ原といわれた桜草の自生地を均して二千戸あまりの住宅と商店、銀行、郵便局、クリニックなどがあり、囲りは田畑や家々、古い神社などがありました。

渡邉友七さんのお住居は、田畑の向こうの新しい平家造り、中庭のある素敵なお家でした。お若い頃から婦人靴の製造販売に携り事業家としても脂の乗った頃だったように覚えています。

近くのお友達と一緒に『調句会』を始めたのはついこの間のように思えます。うかがえばご親戚に歳時記に載るほどの高名な方が居られて、十代の頃から句会に同席されることもあったそうです。私より五歳も上でいらっしゃるのに「友七さん」と気安く呼ばせていただいたのは俳句の慣いのようなものです。『あを』の代表、竹僊堂の佐藤喜孝氏に、句集を編んでいただくのを楽しみにしておられました。敬虔なクリスチャンでもいらっしゃいました。句集を携えて天に昇って行かれたのだと信じています。

渡邉友七遺句抄

句集『隠田』より

花びらを敷きて吾が身を寝かしたし
文をもて姉とつながる不如帰
すずらんに屈み音楽聴くごとし
月見草貨車の力を解きほぐす
鵙ないてきらりと白き妻の髪
極月やマリオネットの如く行く
流れがあり橋と藁屋のあつて夏
口笛の木枯となる身を出でし
妻呼ぶに母呼ぶ如く雪降るか
薬缶提げて墓に寝にくる田草取
枯るるものなき石切山や冬来る

隠田を植ゑて迷子のごとく出づ
屠所の牛なほ秋草を噛みやまず
舟虫の巌剥ぐごとく群れて逃ぐ
夕されば むらさき深し秋の嶽
手を擦れば紙の音して寒波来る
ハンカチ振る光りとなるまで見送りし
夜の底のもの唄ひあぐ田の蛙
土を掘る音の間近に年の暮
走り梅雨灯るがごとく電話鳴る
粥食や蟻かがやきて過ぎゆけり
わらびの子伸びてかなづる渓の水
ひらきそむ嬰児の拳春立てり
あぶら蝉石ころ白き母郷の道
我が一灯妻の一灯秋深む
吾が影を置忘れたり芒原
電柱の影ひとまたぎ菊日和
一月のひるの水照る鶴の胸
竿売の声漂ふや昼寝覚め
遠に父近に母の瞳星涼し

あをキーワード俳句辞典（きき―きけ）

嬉々

雪焼し少年嬉々と帰り来る　早崎　泰江
夏休み学童嬉々として群れる　長崎　桂子

利く

詰め利かぬ言葉あれこれ梅雨ぎざす　関口　ゆき
春の夢利き足で出る墓の穴　佐藤　喜孝
三椏や宿に機転の利く娘　赤座　典子
利き腕の鈍くなりたる野蒜摘む　竹内　弘子
夏負けてスープに利かすハーブかな　森山のりこ
酢を利かせ飯粒立たす五月かな　芝　尚子

聞く

力み抜け経に聞き入る寒の星　森　理和
テロニュース聞きつつ走る葡萄狩　松本　米子
敗戦日聞こえるやうに声を出せ　吉弘　恭子
反古焚いて冬去る音を聞くやうな　鎌倉喜久恵
聞きながす知恵もそなはり落椿　関口　ゆき
奥鬼怒や夜の底より滝を聞く　篠田　純子
聞き溜めて青松虫のいのちかな　堀内　一郎
あをさぎの夜は念仏聞きにくる　篠田　純子
硝子屋のひと日聞き飽く虎落笛　定梶じょう
第九聞き紅白を観て年明くる　森山のりこ
冬紅葉風音聞きてそっと散り　續木　文子

ぎくしゃく

年用意気がかりありてぎくしゃくと　芝宮須磨子

気位

紫に気位高く鉄線花　河合　笑子
群青色気位高く四葩咲き　芝宮須磨子

喜劇

喜劇観し日比谷に春の灯の溢れ　田中　藤穂
雨の日に喜劇見に行く春隣　篠田　純子

危険

「熊危険」立札の先紅葉映ゆ　須賀　敏子

期限

賞味期限切れいくつも残し八月盡　木村茂登子
賞味期限気にしつ過ぎる寒卵　鈴木多枝子
賞味期限切れなどは無しサンドレス　篠田　純子

あを柳集

兼題　力

佐藤喜孝　選

今月は「力」。『岩波現代短歌辞典』の〝力〟の項に「大きく二つに分けると、気力、体力、あるいは能力といった個人に関わる意味と物を動かす作用という意味とに分かれる。（以下略）」として

時の移り個人に及ぶ激しさに一人一人は力なき今も　吉田　漱

清潔にすぎし十年つきつめて生くる力は何処より来む　相良　宏

の二首が揚げられてゐる。先人の俳句では

仔馬爽やか力のいれ処ばかりの身　中村草田男

死神を蹴る力無き蒲団かな　高浜　虚子

念力のゆるめば死ぬる大暑かな　村上　鬼城

しづかなる力満ちゆきばつたとぶ　加藤　楸邨

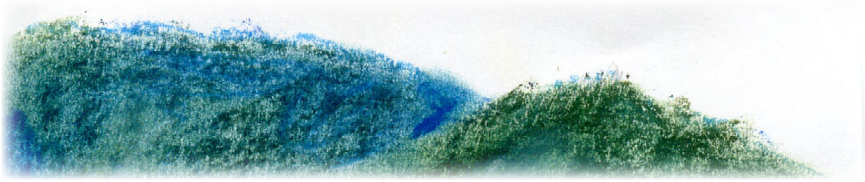
力なく降る雪なればなぐさまず　石田　波郷

炎天の坂や怒を力とし　西東　三鬼

氷菓ごときに突出す舌の力かな　三橋　敏雄

遠郭公見えぬ力で利根流る　渡辺　延子

今回のあを柳集は今少し力が足りなかった。次回に期待したい。



題詠「力」（順不同）

はつ桜人力車婦のうなじかな　篠田　純子

老猫に恋する力ありにけり

国内の核抑止力春寒し

高層の玻璃に春日の力かな

人力車バスと競走桜咲く

山のやうな津波の力辛夷散る　田中　藤穂

力まずに癒ゆるを待たむ春の風邪

三社祭待つ浅草に人力車

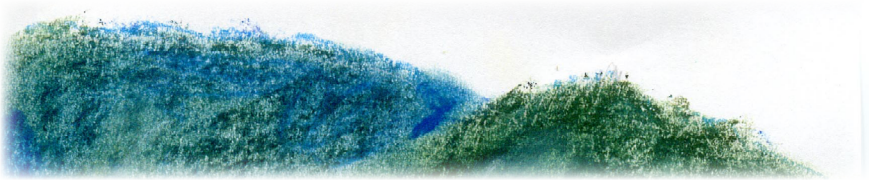
人力車車夫のキリリと夏めける

枇杷若葉筋肉隆々力瘤　森　理和

何故かしら力むくむく枇杷若葉

幼子の無心全力午睡かな

笹粽磁力に優る幼き手



甚平の人力車夫の視線避く　吉弘　恭子
青葉風視力回復せし母と
聴力を失ふ弟夏は来る
小力をだしをしみせし青葉闇
神通力通じぬか今倭が夏に
引力にさからひ過ぎしこぶしかな　長崎　桂子
力投も空しき春の甲子園
尻餅や物種蒔くに力みすぎ
春風や力走ゴールのテープ切る
春場所にちからの出せぬ力士かな　佐藤　喜孝
力道山住んでゐたころ紙兜
まろまろと木陰にすゞし力石
蠅叩く蚊をうつよりは力みたる
空手套力を入れて置かれあり
さくらさくころに新版視力表

四月の句会

傳　中野区・カフェ傳

徒ならぬ日の重なりて桜咲く　敏　子
つなぐ手のまだ冷たくて初桜　喜久恵
黙礼の距離にのどかさありにけり　尚　子
花木瓜の愚直に日数咲き継げり　敦　子
たんぽぽの根はしっかりと何くはぬ　文　子
黒く消す電話番号鳥雲に　藤　穂
川風や蘊蓄のある桜餅　喜　孝
いろといふいろすべてもちさる春の海　理　和
ツナミキズナ世界語となり春暮るる　典　子
萬愚節鯰の神社建立す　実
地震以後耳をそばだて黄水仙　綾　子
風船が象にかはりし春日かな　恭　子

調句会　浦和・岸町公民館

今年竹あれよあれよと抽んでる　泰　江
横たはるわれ魚めく梅雨の底　藤　穂
葉桜の湖底に埋没したる村　綾　子
朝霧の底に歩荷とすれ違ふ　敦　子
朝刊を取りに出て蟻おどろかす　弘　子

七座句会　中野区・小川苑

アメリカのともだち作戦春の風　純　子
蝮草たっぷり水を含む山　綾　子
屋形船見下ろしてゐる荷風の忌　藤　穂
タンポポが只一株で歩道わき　須磨子
おばしまに凭るる肩の糸桜　恭　子
執着の春や本来無一物　東亜未
原発の口を開けたる鬼の口　喜　孝
春の鬱湯のみ茶碗のいと重く　理　和

傳句会　毎月第2火曜
カフェ傳　森　理和
(03-3368-4263)

調句会　毎月第3金曜
岸町公民館　竹内弘子
(0488-86-3501)

あを吟行会
詳細は吟行案内で

七座句会　毎月第4火曜
小川苑　吉弘恭子
(090-9839-3943)

あとがき

今年の「あを」は高齢化の波を被り、何人かの会員とお別れすることになってしまった。気落ちしないと言ふ方が不自然であらう。しばらく頭を空つぽにして十一年目の出発をしたいと思ひ始めてゐるところです。昨年の八月は酷暑であつた。三四郎池に吟行の計画を立て下見に行つたが、それだけで暑さ負けをしてしまひ休会にした。今年は初めから八月は吟行休会と決めました。

このところ多忙で連句の会をお休みにしてゐる。うずうずしてゐる。皆様もお忙しさう、声を掛けるのをためらつてゐる。身辺を整理しなければとは思ふのだがきつとこのまま突進んでゆくことだろう。この欄もまとまりの無い文が続いてゐる。あとがきの代はりにすずしくなる？写真を一枚。〈喜孝〉

ご芳志多謝

須賀敏子　様

二〇一一年六月号

発行日　六月二十五日
発行所　東京都中野区中央2-50-3
電　話　090-9828-4244
佐藤喜孝
竹僊房
印刷・製本・レイアウト
カット／恩田秋夫・松村美智子
表紙・佐藤喜孝
会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
郵便振替　00130-6-55526（あを発行所）